

# 『初心者学習指導手引』 (福岡学芸大学久留米附属中学校・1950年)の考察

A Study on “*Beginner’s Guidebook to Teaching*” (1950)

河野智文

Tomofumi KAWANO

国語教育講座

(平成24年10月1日受理)

## はじめにー資料の概要ー

本稿で考察の対象とするのは、扉に示された書名によれば、『初心者学習指導手引』である（以下、「本書」とする）。背には『初心者への指導書』とあり、表紙には『GUIDEBOOK』と表示されている。判型はほぼA5判、総ページ数は159、奥付は以下の通り。

昭和二十五年十月一日発行（非売品）

発行所 福岡学芸大学久留米附属中学校

印刷所 香和印刷株式会社（住所と電話番号は略ー引用者）

発行者表記は、扉は奥付と同じ「福岡学芸大学久留米附属中学校」、背と「はしがき」は「久留米附属中学校」となっている。「はしがき」の一部は、以下の通りである。

はしがき この書は近き将来に於て教育者たらんとする若い人達のために書かれたものである。このことはその精神内容の稚さを前提として導くと言う意味もあるが更にそれよりも教育の最前線に将に入らうとする同志に今我々の当面している諸情況の適確な説明と判断を伝え、彼らが直ちに遭遇するであろうところの困難な諸条件への適応と極めてフレキシブルなそして主体的な行動を期待すると言う立場で書こうと試みたものである。蓋し現代と言う時代の嵐の中にあつて個人に於ても民族に於ても死と滅亡を予想しながら生存して行くことの如何にきびしい現実であるかを思うとき、それらを指導することを本来の使命とする教育者群へ新に組み入れられる若き人々に対する吾人の心やりも、生やさしいものであつてはならないからである。（中略）

新教育が導入せられてすでに五年、人は漸くその事実の正しさの中に習慣づけられてニュースと新しい事実を無条件に待つていよう風になりつゝある。教育のことは教師自ら国家と民族と人間の危機を痛切に感ずるところから始まる。そしてそれらに対する限りない愛惜から諸々の具体的方策が生れてくるのである。新教育の主張や技術は、その確信に基いて適当に位置づけられなければならない。

この書が果してそのような役割を果たしうるかどうかは分らないが吾人の意図のあるところを述べて序言とする。

昭和二十五年九月 久留米附属中学校

本書の成立事情については、現時点では調査が及んでいない。奥付に「非売品」とあることから、公開研究会で配付されたものかとも考えたが、この「はしがき」には、「近き将来に於て教育者たらんとする若い

人達のために」、「教育の最前線に将に入らうとする同志」、「教育者群へ新に組み入れられる若き人々」とあることから、大学生を対象にしたものとも考えられる。この点についての判断は保留とし、さらに調査することを今後の課題としたい。本書の目次は、以下の通りである。

## 序

### 第一章 新しい学習指導

#### 第一節 カリキュラムと学習指導

#### 第二節 学習活動の本質

#### 第三節 学習活動の組織

#### 第四節 新しい学習指導の展開

### 第二章 学習指導の方法一般

#### 第一節 学習指導の展開と指導

#### 第二節 学習指導的基本的方法

#### 第三節 学習指導案の意義とその要件

### 第三章 国語科学習指導上の諸問題

### 第四章 社会科学習指導上の諸問題

### 第五章 社会科日本史学習指導上の諸問題

### 第六章 数学科学習指導上の諸問題

### 第七章 理科学習指導上の諸問題

### 第八章 音楽科学習指導上の諸問題

### 第九章 図画工作科学習指導上の諸問題

### 第十章 保健体育科学習指導上の諸問題

### 第十一章 職業、家庭科学習指導上の諸問題

### 第十二章 外国語科学習指導上の諸問題

### 第十三章 自由研究学習指導上の諸問題

### あとがき

本稿では、国語科の視点から、本書について考察する。まず、第一章、第二章から、本書の基本的な考え方を把握し、つぎに、国語科に関する第三章を考察することとする。

## 1 基本的な考え方について

本書、第一章「新しい学習指導」は四節から構成されており、その第一節「カリキュラムと学習指導」では、「カリキュラムの確立がなければならない」という見出しのあと、次のように述べられている。

新しい学習が従来の教科指導でなく学習者の全生徒を指導すると言うとき、それは学習者に対して如何なる目標の上に如何なる内容を何時指導するかと言ふカリキュラムの確立がなければならないと言ふことになる。

教科書によつて各教師がバラバラに知識を注入しその記憶を強制した古い教育に反省と批判の眼を向けた進歩的教育改造運動は子どもの自発性と可能性に（ママ）信頼し子供たちに筋の通った学習環境を整えてやり彼らに対して望ましい経験と活動を行わせることを目指しカリキュラム改造をすゝめて来た。

カリキュラムは本来学習活動の実際場面を予想するもので、つまり子供たちにどのような経験をさせ又行動させるかを終始一貫して考えるもので、之に対しての用意が整わずしては学習の展開指導は出来ない事である。

換言すればカリキュラムの中に学習指導は位置づけられて考えらるべき性質のもので一般的な学習指導のための理論や系、或は教科の内容と言ふ類のものは、具体的指導場面に於ては参考とはなるにしても、それだけで完全な学習指導が出来るものではない。

もし出来ると考えるならば、その人は子供を考へないで眼を閉ぢて教育が出来ると言っている事にならう。（1 ページ）

「カリキュラムの中に学習指導は位置づけられて考えらるべき性質のもの」として、「学習の展開指導」、「一般的な学習指導」や「具体的指導場面」が指していると思われる単位時間の個別具体の指導法に先だつて、「学習者に対して如何なる目標の上に如何なる内容を何時指導するかと言ふカリキュラムの確立」を述べている。また、「教科書によつて各教師がバラバラに知識を注入しその記憶を強制した古い教育に反省と批判の眼を向けた進歩的教育改造運動」に賛意を示し、「子供たちにどのような経験をさせ又行動させるかを終始一貫して考える」ことの必要性を述べている。当時の中心的な考え方に沿った立場にあるといえよ

う。（注1）

「第二節 学習活動の本質」では、まず、「自然的で且必然的な学習者の欲求を育てる」という見出しのあと、「学習指導は人間の行動の必然性に手がかりをおき自由なる精神のはたらきに基いてより高い目標群を選択させて行くわけで之を生活を育てると言ふのである。（2ページ）」と述べ、「目的」と「必然性」を学習指導に位置づけることの重要性にふれている。

つぎに、「学習活動は高度の生活である」という見出しのあと、「一貫した目的活動であること、而も合理的な行動の世界、つまり教師も生徒もそのために高度の技術を工夫することが大切となろう。（2ページ）」と述べ、さらに、「何をやるかと言う自覚」「目標の把握」が主張されている。

「第三節 学習指導の組織」では、まず、「学習構造の全体計画」が、次のように示されている。

- 一、教室学習活動 この場合は中心課程及其関連と教師の指導の下に問題解決をする。
- 二、クラブ活動 この場合は教師の指導は背後にあつてむしろ生徒の選択課程として個人的要求に応える一般教養である。情操、表現、体育の一部もこの中に含まれる。
- 三、参加活動 之は具体的な人間関係の望ましいあり方を実地に試みるコースで、民主的集団訓練をする。
- 四、健康活動 之は他のすべてのコースの基礎になる活動で、独立に常に一本通さねばならない。

（3ページ）

本書が考えるカリキュラムの大枠が、「全体構造」「全体計画」として示され、「学習者に対して統一ある合理的学習環境を与えようとする努力」の必要性を述べている。「教室学習活動」は、「中心課程及其関連とに教師の指導の下に問題解決をする」ものとされ、さらに「教室学習の全体計画」の見出しのあと、次のように述べられている。

教室学習と言ふのは、つまり教師の積極的役割でもつて、中心的な学習をさせる場合をさすので、単に学習の場所をさすのではない。一般にはいわゆる教科学習をさす。

さて新し（ママ）教育で、教科と言う場合、従来の如き文化遺産の体系に基いて分類された教科の意味内容でなく、望ましい人間形成のために如何なる陶冶領域と内容を必要とするか、つまり子供たちに“何”を与え“何”をやらせるかと言う“何を”である今日教科の名称は一応従来通りであるが、それに盛られている内容の採り方、したがってその取扱の態度は大きな違をもっている。（中略）

現在の如く中学校に於て各教科担任が分れて指導し一方国家規準も亦教科別に示されている場合教科組織を新しい意味に於て再編成し全体計画を合理的に打ちたててことは極めて困難な実情である。然し学校は教室学習の全体計画をなさねばならない。

現状に於て可能な全体計画は、先づ各教科内で何をやるのかについて見透しをもち、教科書を主体的に使うことから始められる。子供と環境にゾンデを入れ乍ら目標と効果をにらんで学習活動を適確に指導していく、そのような計画は先づ横に長期に亘る見透しの上に立てらるべきであろう。

次に各教科間の連関を見て行かねば学習者に重複した作業が課せられることになる。この場合単に題目だけの調整は不十分で充分その取扱う内容について打合せられねばならない。以上の事は少くとも現在の中学校でなさねばならず又なし得る段階である。

（3-4ページ）

「教室学習」とはここでは、「いわゆる教科学習をさす」ものであり、「現在の如く中学校に於て各教科担任が分れて指導し一方国家規準も亦教科別に示されている場合教科組織を新しい意味に於て再編成し全体計画を合理的に打ちたててことは極めて困難な実情である」という認識のもと、「現状に於て可能な全体計画は、先づ各教科内で何をやるのかについて見透しをもち、教科書を主体的に使うことから始められる」と提言されている。カリキュラム作成は、調査や立案に労力と時間を要するため、まずはこのように提言されたと思われる。

「中心学習と基礎学習」については、次のように述べられている。

教室学習がひきしまつた統一をもつために各教科間の連絡だけでよい。人間形成は一つの中心目標に集中されて陶冶が行われ、行動が一貫した観念の下に意味づけられて始めて可能なことで、教育の本質から云つても諸々の活動に位置を与える中心活動が要求される。茲に観念とは事実がもっている意味でもし従（ママ）観念の上に於て、つまり頭の中でそのような中心を考えて割切る事だけならば憲法や基本法をもつてくれればよい。今我々が問題としているのは、そのようなものでなく一つ一つの学習活動を具体的にどうしたら一貫した統一にまでとつて行くことが出来るかと言うことである。現状の各教科組織をもつてどうしたら教育作用の中核を据えることが出来るか。

自然に対する学習、人間関係に対する考案或は情操表現のための学習それぞれの活動が調和し位置づけられるもの、その中心になるものが何らかの形で浮上つてくることが大切で、そのために現在としては各教科間で大きく目標の統一がなされねばなるまい。

国家、社会、民族の現状と将来に対する深い洞察から各教科のそれぞれの立場と内容をもつて大きな統一を一本通して行かねばならない。現在一般に社会科が中心と言われるが、それは教科としての社会科ではなく、社会科が主として担当している現代社会の改善のための内容である。そこで現状に於てなし得ることは、別に一本中心を通すか或は各教科内容の中から中心に活動を取り出してそれぞれの立場から調和を考えていくか、何れかであろう。

中心活動に対して基礎学習が一般に考えられる。然し乍ら今日トピックや行事など、結びつけて何らかの形で従来の基礎と言う観念から脱しようと努めているが、実際問題としてはたとい純粋に基礎であつても目的意識をはたかせ一つの言葉や技能の取得や習熟が新なる世界や境地を開拓するものにして扱はうとしている。つまり中心と基礎とげん密に分けないのが望ましいのではないか。（4-5 ページ）

「現状の各教科組織をもつてどうしたら教育作用の中核を据えることが出来るか」という問いには、「現在としては各教科間で大きく目標の統一がなされねばなるまい」が対応するが、本書では、その具体的などころまではふれられていない。「基礎学習」については、「実際問題としてはたとい純粋に基礎であつても目的意識をはたかせ一つの言葉や技能の取得や習熟が新なる世界や境地を開拓するものにして扱はうとしている」として、「中心と基礎とげん密に分けないのが望ましいのではないか」と述べている。本書の国語科でも、そのように位置づけられている。

「第四節 新しい学習指導の展開」では、まず、「学習指導の基本的条件」の見出しのあと、以下のように、「現実感」、「集団思考」、「目的学習」が挙げられている。

- 一、現実感 学習者が生きた興味を以て問題にとりくむことである。そこには自然なしたがつて必然的な流れに於て緊張をする如く導かれねばならない。そのようなフンキ気にもつて行くかどうかは教師の構想力に負うところが大きい。
- 二、集団思考 新しい学習は学習者相互の人間関係を常に民主的に育てるため万有機會を利用しようとしている一人の個人の考えや行動を集団の中に位置づけ友愛と協力で以て育て上げようとする姿が教室の内外を問わず、性格づけられて行かねばならない。就中教室外の活動に於て望ましい人間関係を育てあげそれが教室の中に持込まれる努力がなされているのは望ましい傾向である。
- 三、目的学習 活動は、学校と云う組織の中に於て、時間的制約の上に行われる極めて高度の生活であるそのためには、目標がはつきりと捉えられ、それを更に具体化したところの諸能力が具体的に押えられ、不必要な徒勞な作業は切り捨てられねばならない。目標群に角度をつけ且はつきりした活動でなければならぬ。そのためには教師は学習者の興味と緊張を内に観察し能率を高めることが大切とならう。（5-6 ページ）

つぎに、「学習活動の質とその展開」で、「関連基礎学習」について述べられたところを、以下に引用する。

### 三、関連基礎学習

これを生活現実と如何にむすびつけるかは頗るむづかしい。この原因はすでに述べたが現状としてトピックや行事との連関をつとめて生活化する以外手はあるまい。然しながら安価なトピック学習で大事な

内容の押えがおろそかになつてはなるまい。之もやはり目標の明確な把握から、時には純然たる練習が徹底的に行われることがおこることは当然である。（7ページ）

ここで、「純然たる練習が徹底的に行われることがおこることは当然である」と述べられている点が注目される。

「第二章 学習指導の方法一般」では、まず「第一節 学習活動の展開と指導」で、「目的」と「意欲」の重要性が強調されている。また、学習過程に沿った留意点について、「興味」「目的」「問題解決」が挙げられ、それらが「学習目的到達の意欲によつて貫かれて必然的に次々と発展するものでなくてはならない」ことが主張されている。この章では他に、「分団学習」、「自学」、「討議指導」、「講話指導」、「視聴覚教育」、「教育評価」についても述べられている。

## 2 国語科学習指導について

第三章が「国語科の指導」である。「一、はじめに」のあと、「二、国語科学習指導上の諸問題」では、以下に挙げる問いに答える形で、記述が展開されている。

- 問1 中学校の国語学習はどんな範囲にわたつて指導されねばならないか
- 問2 五分科（「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」「文法」－引用者注）の指導において特に留意すべきことは何か
- 問3 国語の教師の立場をどう考えたらよいか
- 問4 学習内容はどうかあるべきか
- 問5 新しい国語教育のねらいはどうか
- 問6 国語教育目的を達するための国語学習はどんな目標のもとに指導されたらよいであろうか
- 問7 国語学習指導の方法はどんなに改善されなくてはならないか
- 問8 国語の単元学習とはどんなことか
- 問9 単元学習と教科書学習との関係をどう考えるか
- 問10 評価はどうなくてはならないか

「問」に対する説明は、基本的には、学習指導要領に沿いながら、記述されている。

問1（中学校の国語学習はどんな範囲にわたつて指導されねばならないか）では、文学について、次のように述べられている。

文学は読むことの中にふくませてあるのであるが、これも『読むこと』が主として読む技術の指導に重きをおくならば、文学は又別に一分節として立てゝよい、この場合の文学指導は文学的表現技術の指導を中心とするのではなく、むしろ文学を読み味わい、そこに人間形成の契機を見いだそうとする技術としての読書指導にその重点が置かるべきであろう。（24ページ）

文学の取り扱いは、「主として読む技術の指導に重きをおく」この時期の国語教育では一定しないところがあるが、本書では、「文学は又別に一分節として立てゝよい」という見解を示している。

問2（五分科の指導において特に留意すべきことは何か）では、「読むこと」について、次のように述べられている。

### （三）読むこと

これまで『読みに始まつて読みに終る』という程に国語教育で最も重んぜられたのであるがそれは狭い教室内での年二冊の読本を対象としたにすぎないものであつたのである。今後はこうした窮屈な読みから解放されなくてはならない。

読む生活は第一に知識や経験を得るために行われ第二に娯楽や鑑賞のために行われる。

第一の場合は研究のための読書であるが第二の場合は最も一般的な読書である。それにも拘わらずこの

方面の読書指導は学校では殆ど行われず、本を読んで楽しむなどということは国語教育からは縁の遠いもののように考えられていた。

これからは通読、精読、味読といった読みの外に、『拾い読み』や辞典、年鑑、統計書等の読み方、目次、索引の読み方、図書館の利用法等の新しい読書技術の指導が必要である。

読みの形態も音読中心から社会的に必要な黙読中心の指導に切り替えられることが必要である。

(26 ページ)

ここでは、「娯楽や鑑賞のため」の「読む生活」と、「社会的に必要な黙読中心の指導」が、当時の方向性をよく示すものとなっている。それは、

言語活動の目的、理想、能力を一体的に礎して、形式と内容の分離する弊をさけてあるのは注意すべきことで国民精神の涵養や、文学の鑑賞、詩歌の創作、さては古典の学習などが重んぜられた国語教育から言語活動を重んじ、言語技術の習得を第一にする新しい国語教育の転換が明らかに示されたというべきであらう。

(30 ページ)

という把握にもあらわれている。

「問 7 国語学習指導の方法はどんなに改善されなくてはならないか」の全文は、以下の通りである。

これまでの教科書中心、なかでも古典中心の国語教育が行われていたときには学習形態は全く講義式で、指導過程は、語釈－通釈－批評といった古典注釈の方法がそのまま用いられたり、進んだ所でも、主題－構想－叙述などと全体から部分への解釈学的方法が行われ、しかも読むこと以外の言語活動は殆ど顧みられなかつた。これでは現代文を主とし、言語教育を中心とする新しい国語教育に於てはとうていその目標を達することはできない。

新しい国語学習では、

- ① 聞く、話す、読む、書く言語活動を分離せず、総合的に学習すること
- ② 価値ある言語諸活動の経験を豊富に与えること
- ③ 自発的な生き生きとした言語活動は、生徒の興味を持つ話題の上に行われること
- ④ 言語は具体的な言語生活の中において学ばれること
- ⑤ 国語学習は生徒の自主的な学習であるべきこと
- ⑥ 生徒の能力の個人差に応ずること
- ⑦ 学習内容は、地域の特殊性や社会的必要に応じ得られること

これらの諸点が考慮され、改善されなくてはならない。こうした要求に応ずる方法は何であろうか。それこそ具体的な一連の活動を組織した単元学習であろう。

(30 ページ)

「総合的」「活動の経験」「興味」「言語生活」「自主的」「社会的必要」など、当時の動向を積極的に反映したものとなっている。

「問 8 国語の単元学習とはどんなことか」の全文は、以下の通りである。

国語の単元学習は生活課題の解決ではなく、社会科的に考えるのではない。本来、単元ということばは学習指導要領編さんとともに、特に社会科の単元の問題を中心に扱ったようである。社会科の単元が、言語の理解、知識、技術、習慣、態度、鑑賞の発達に価値ある材料と活動を含んでいることは確かであるが、こゝでは言語は目的とは考えられず、手段として考えられる。言語の本質は本来、手段的機能的なものであるから、それでもよいわけであるが、国語科それ自身としては国語の力をつけることが主目的でなくてはならない。社会科の指導や理科数学等の教科書を読むことから表現力、発表力、読書力等も増すであろうが、国語の力をほんとうにつけようとするには、そうした指導の間にことばづかいを正したり、読みごえを改めたりしなくてはならない。そうなると社会科なり、理科なり、数学なりの固有の目的を邪魔することになるし、又こうしたことでは国語力の正当な発展は期し得ない。言語は内容を離れては存在しない。内容は教科にまたがつている。他教科では内容を主目的とし、国語では形式を主目的とする。形

式、すなわち言語そのものの発達について、内面的な秩序をつけておいて、生徒になるべく興味があり、広い経験にうつつたえることのできる話題や、問題が提出されなくてはならない。

例えば『ラジオ』ドラマを話題として取り上げた場合

- ① ラジオの聞きかた（聞くこと）
- ② 放送のしかた（話すこと）
- ③ シナリオの読みかた（読むこと）
- ④ シナリオの書きかた（書くこと）

のように聞く、話す、読む、書く活動が組織され、放送用語や、放送効果などの問題が取り上げられれば、その根底となる発音、アクセント、語い、文法、標準語と方言など問題となって、いろいろな言語活動の経験が与えられるのである。

このような、全体的な、統一された一まとまりの学習内容（諸単位が有機的にふくまれる）が、生徒の興味ある現実の生きた経験に即して、活動的に学習されて、課題を解決していくところに国語の単元学習の真の意味があると考ええる。  
(30-31 ページ)

単元学習を、「全体的な、統一された一まとまりの学習内容（諸単位が有機的にふくまれる）が、生徒の興味ある現実の生きた経験に即して、活動的に学習されて、課題を解決していく」ものと把握しているが、いっぽうで、「他教科では内容を主目的とし、国語では形式を主目的とする」と、「内容」と「形式」に明確な区別を与えている。

「問9 単元学習と教科書学習との関係をどう考えるか」の全文は、以下の通りである。

この二つ（単元学習と教科書学習－引用者注）は二元的に考えるべきではない。作業単元の問題は教科書編集者の問題であろうし、同時に又、教科書利用者であるわれわれ教師の問題でもあるからである。これからの国語学習指導は一定の教科書の教材を主要資料として教授上の単元を作成するか、教科書以外に広く資料を求めて単元を作成するかであろう。

よい教科書は学校や教師の単元計画と単元展開とを考えて教材を編集されたものであり、そうした教科書の一課一課はそのまゝ作業単元として採用することができる。しかし教科書は全国一律のものであるから、教師としては生活の必要、興味能力に合わせて活用しなくてはならない。要するに教科書学習を単元学習でやるのであつて、使用教科書の活かししかた使い方の工夫が大切である。自作のカリキュラムによつて指導することは最も望ましいことであるが、それを絶対的なものとしてゆずらないことは、他作の教科書をむぞうさに呑みこむのと同じように共に实际的ではないと思う。現段階の事情から考えれば、教科書を資料としてカリキュラムを構成するのが最も妥当ではないかと思う。  
(31-32 ページ)

「要するに教科書学習を単元学習でやるのであつて、使用教科書の活かししかた使い方の工夫が大切である」ことが主張の中心であり、「自作のカリキュラムによつて指導することは最も望ましいこと」と対比して、「实际的」であると述べている。実情を反映した見解といえよう。（注2）

以上挙げた、十の「問」のあと、「附」として、「研究問題」、「参考書」、「国語科指導案」が挙げられている。「研究問題」は、以下の七つである。

- 1 国語教育者としてもつべき言語観について考察せよ
- 2 言語活動の五分科の学年別指導目標を作つてみよ
- 3 国語教育としてのローマ字教育について考究せよ
- 4 単元学習における評価のあり方について研究せよ
- 5 当用漢字、現代かなづかいの使用について徹底させる方途を考えてみよ
- 6 単元学習における文法のとり扱いについて、とくに文語文法はどうすればよいか考えよ
- 7 古典の教育上に占める価値とその指導要領について研究せよ  
(32-33 ページ)

当時、関心が集まっていた問題がどのようなものであるか、推測できるものとなっている。その後に示されている学習指導案は、以下の通りである。

中学校第三学年 国語科指導案 指導者 何 某 印

### 一、単元 考える楽しさ

二、単元設定の理由 いろいろな自然現象を対象にとらえて、何だろう、なぜだろうと考える自然科学的考察からは、科学する心が養い育てられるし、人は何のために生きるか、われわれは何のために学問するのか、幸福とは何か、神とは何かなど、いろいろの人生問題をとらえて、思惟していく所からは、いかに生きるか、いかに信ずるかという哲学する心が育てられるであろう。前者のように、考える根拠を具体的事実として把握し、諸現象を解釈し究明していくことは、これまでよく心がけられて来たと思われるが、観念上の問題をとらえ、抽象的に思惟し、解決していくことははるかに困難なことであると思われる。しかし前者から後者への発展はこの時代から一層はつきりと現れてくる。こうした問題を深く考えたり、解決しようとする意欲をさかんにしたり、示唆をつかみとつたりする力を身につけさせてやることは国語科の大きなつとめであろう。本単元はこうした見地から、こゝにいろいろな言語生活を組織し、活発真剣な討議を期待して取り上げたのである。

### 三、目標

- 1 いろいろな自然現象、社会現象、人生問題などを観察したり考えたりするために、一般の随筆の読み方、書き方を学ぶ。
- 2 物事について深く考えたり、自分の考えを正確に述べたりする態度や技能を身につける。
- 3 つぎのような技能を身につける  
イ 適確に叙述する      ロ 核心をとらえて表現する  
ハ 趣のある表現をする      ニ 考えを順序だてて書く  
ホ 相手にわからせるように、自分の意見をはつきりと要領よく述べる
- 4 新聞紙上現れる社会的な問題に関心を持つようにする

### 四、計画（二〇時間）

- 第一次 単元への導入と学習計画…一
- 第二次 随筆『ふじだなの蔭から』を中心に、随筆や感想文の読み方書き方の研究…八
- 第三次 『幸福への道』を中心に研究討議…九
  - 第一時 予備調査及各自幸福感発表
  - 第二時 幸福への道（一）（二）について問題作成
  - 第三、四、五時 問題研究
  - 第六時 研究結果の発表と討議 主として（一）について……本時
  - 第七時 研究結果の発表討議 主として（二）について
  - 第八時 総括的研究討議
  - 第九時 幸福論を書いて発表する
- 第四次 学習のまとめと効果判定…二

昭和二十五年七月五日（水） 第三時限 本時 第三次の第六時

五、主眼 幸福への道をよんで、快楽は幸福の要素ではあるが、その追求は必ずしも幸福とはならないこと、快楽の中正を得た享受から、幸福への道が開かれるという、幸福と快楽との関係を理解させるとともに深く考えたり、自分の考えを正確に述べたりする態度や技能を身につけさせたい。

### 六、方法

- 1 前時までの学習を反省し、本時学習の目標を確認させる
- 2 よませる
- 3 発表、話合を中心として左のことを考えさせる



- (一) 幸福と快樂との関係
  - (二) 快樂は幸福の要素であるが、その追求は必ずしも幸福とはならない例をあげさせる
  - (三) 快樂は相対的なもので、常にその代償を要求する例をあげさせる
  - (四) 快樂の断念、否定がどうして幸福への道と考えられるかを考えさせる
  - (五) 快樂はいわば人生の驛馬であるという理由を具体的に考えさせる
  - (六) 快樂の中正を得た享受から幸福への道が開かれること
- 4 本時学習を総括、反省させる
  - 5 次時の学習について話し合わせる

#### 備考

本次学習の『幸福への道』の原典は天野貞祐著『若き女性のために』である。これは二十六範の短文からなり、二篇を除いて、いずれも敗戦後さまざまな機会に、著者が平生いだいている人生観を述べたもの。

若き女性がいかなる思想と情操とに生きるかは、その人たちの生涯がいかなる意味と価値とを持ち、尊敬と幸福とにあたえるものとなるか、という個人的問題であるに止まらず、日本の将来がいかになりゆくかという国家的問題である。若い女性の精神生活が豊かでなく、健康でなくして、輝かしい平和日本の生まれるわけはありえない。こういう観点から述べられているのであつて、その内容は本文と重複する点が多い。

本文は本書中の『若き人達と幸福を語る』という三節から成る一編の初めの二節をとつたのである。

(34-35 ページ)

実際に実践されたものではなく、想定上のものであり、略案でもあるが、当時の特徴を反映していると思われるのは、以下の点である。

- ・話すこと、話し合うことを重視し、「活発真剣な討議」を実現しようとしたこと。
- ・目標設定では、「技能」が多く挙げられていること。
- ・問題作成、発表、討議の筋道で学習が展開されていること。
- ・「本時」の最後で、「次時の学習」について、生徒に話し合わせていること。

ただし、いっぽうでは、思考について、思想や情操についても、教育内容として目配りがされている。これは、前述の「内容」より「形式」という考え方と矛盾するが、「内容」をまったくとりあげず、「形式」（あるいは技能）だけで通すことについての違和感が、具体的な授業構想の段階では、指導者に実感されたからではないかと考える。

#### おわりに

資料の提示が中心となり、考察にじゅうぶんな紙幅を割くことができなかった。成立事情等も含め、今後の課題としたい。本書は、「初心者」にむけられたもので、久留米附属中学校の主張を伝えるというよりも、当時の標準的な考え方をバランス良くまとめたものとみることができる。それだけに、一般的な動向をうかがうことのできる資料として、価値あるものではないかと考える。

#### 謝辞

資料の閲覧にあたっては、本学教授・前田眞澄先生（前福岡教育大学附属久留米中学校長）のご高配を賜りました。厚く御礼申し上げます。

#### (注1)

教科課程は、このように、社会の要求によって考えられるべきものであり、また児童青年の生活から考えられるべきものであるから、社会の変化につれて、また文化の発展につれて変わるべきものであるし、厳密に言えば、その地域の社会生活の特性により、児童青年のその地域における生活の特性によつて、地域的に

異なるべきものである。教育が地域地域の社会に適切なものとなるには、どうしても、そうならなくてはならないはずである。だから、教科課程は、それぞれの学校で、その地域の社会生活に即して教育の目標を吟味し、その地域の児童青年の生活を考えてこれを定めるべきものである。(11-12 ページ)

(『学習指導要領一般編(試案)昭和二十二年度』文部省『学習指導要領一般編(試案)昭和二十二年度』1947年3月20日。引用は、国立教育研究所内戦後教育改革資料研究会編『文部省学習指導要領1 一般編』(日本図書センター、1980年12月25日)によった。)

学校の教育プログラムは、具体的に一人々々の児童生徒の学習活動を導き、たくましい社会人としてすこやかな成長発達をとげるための教育プログラムであって、勿論、社会理念の要求にも応え、委員会管区社会生活の一般的要求にも即し、人間として一人々々が完成するような全人的視点に立って計画さるべきである。従って、全き意味においてカリキュラムの名に値するのは、学校の持つ具体的な教育プログラムであるといわれなければならないのであろう。(28 ページ)

(教師養成研究会『教育課程—カリキュラムの構成と展開』教師養成研究会『教育課程—カリキュラムの構成と展開』学芸図書、1949年11月28日。)

(注2)

私は、各地域や各学校で単元表を作る必要はない、無意義だといっているわけではない。無意義どころか、作るとはきわめて必要である。ともかく、何もないのだから。

しかし、いくら苦心しても、それほど独自のものはできまいというだけである。似たりよったりになるだろうというのだ。それも+2の、理想的な評価のできる似たりよったりではなくて、±0の一可もなく不可もなしの一似たりよったりができるのである。±0であるなら、むしろ、出来あいのものの理會を深め修正するというやりかたの方が手がたくもあり、効果的だ。はっきりいえば、単元表のニューフェースを作るよりも、既成単元表の具現であるところの教科書を、単元的に十分に理會することだ。現行教科書は、正しい意味での単元的教科書ではない。しかし、おのおのは、おのおののカリキュラムに支えられている。そして、一課単元か数課一単元の形をとり、有効な単元学習に対して用意されている。(383 ページ)

(倉澤栄吉「国語の単元と教科書」新日本教育文化研究所編『教育復興』第2巻第10号、東京書籍、1949年12月1日。引用は『倉澤栄吉国語教育全集1』(角川書店、1987年10月20日)によった。)

※資料中の漢字は現行の字体で引用し、仮名遣いは、一部をあらためた。明らかな誤植と思われる点は修正し、記号やレイアウト等についても読みやすいように修正している箇所がある。中略はすべて引用者(河野)によるものである。